花鳥風月

Vol.7

自然素材は時にあたたかく感じます。
そんな優しさを感じるフリーペーパーです。

～自然と友に生きる～

-communion with nature-

■インタビュー記事　ー有機農業実践農家「NO-RA～農楽」愛川町／千葉康伸さん
ー日本みつばち養蜂なかがわ
相模原市緑区（旧藤野町）／中川重喜さん

■自然素材住宅のお宅訪問

■家庭農園のための有機菜園レッスン

愛川町で有機農園「NO-RA～農楽～」を営む千葉康伸さんを訪ねました。
自分の生き方を見つめ直した結果、お金よりも心の豊かさを選び、農業の世界に飛び込んだという千葉さん。本当の豊かさってなんだろう…？　自然とともに生きるってどういうことなんだろう…？　千葉さんのお話には、そんな疑問の答えがたくさん詰まっていました。

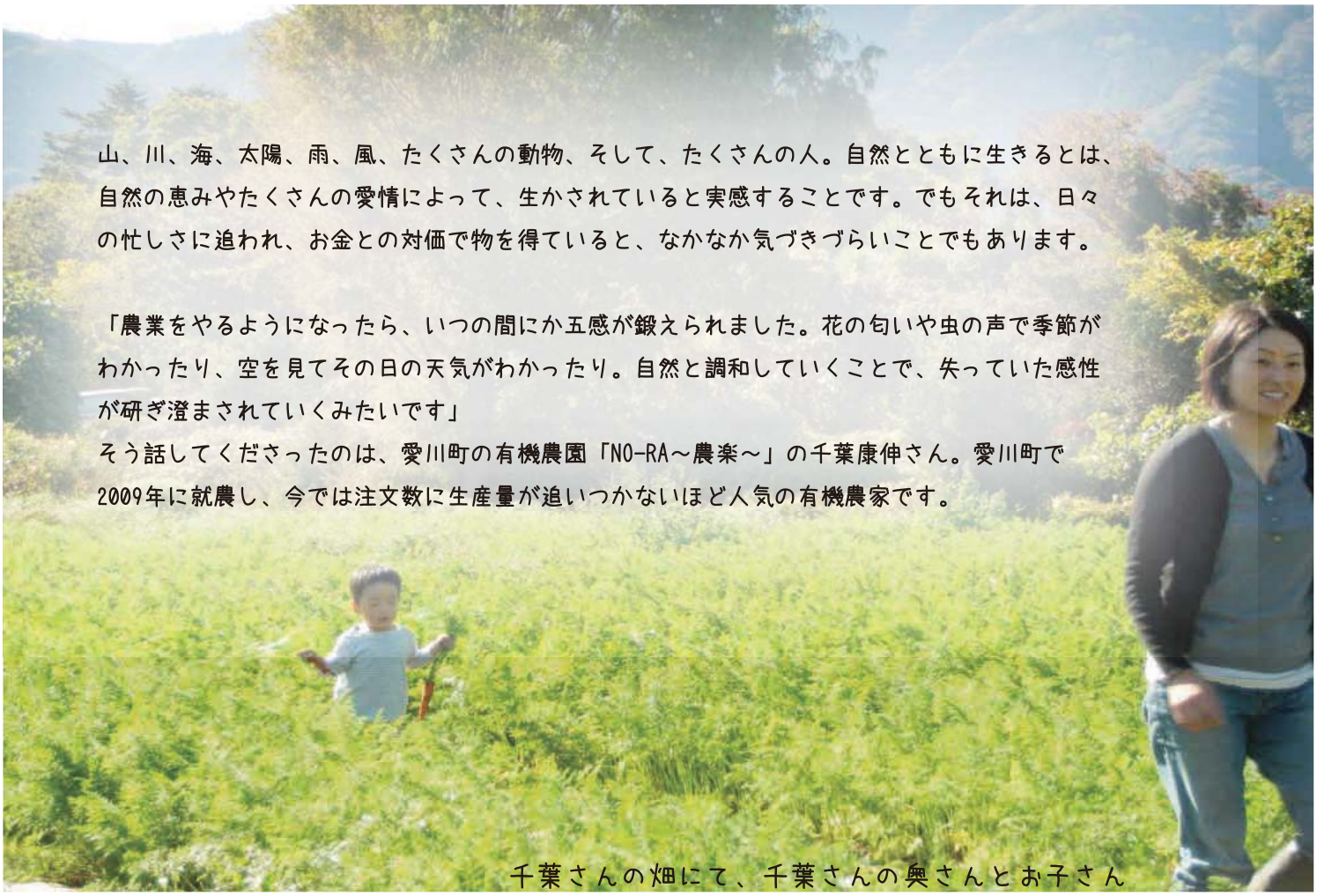
INTERVIEW1

サラリーマンから有機農家へと転身！大変だけど楽しい農との日々

有機農業実践農家
「NO-RA～農楽」
愛川町／千葉康伸さん

山、川、海、太陽、雨、風、たくさんの動物、そして、たくさんの人。自然とともに生きるとは、自然の恵みやたくさんの愛情によって、生かされていると実感することです。でもそれは、日々の忙しさに追われ、お金との対価で物を得ていると、なかなか気づきづらいことでもあります。

「農業をやるようになったら、いつの間にか五感が鍛えられました。花の匂いや虫の声で季節がわかったり、空を見てその日の天気がわかったり。自然と調和していくことで、失っていた感性が研ぎ澄まされていくみたいです」
そう話してくださったのは、愛川町の有機農園「NO-RA～農楽～」の千葉康伸さん。愛川町で2009年に就農し、今では注文数に生産量が追いつかないほど人気の有機農家です。



千葉さんの畑にて、千葉さんの奥さんとお子さん

■本当の幸せってなんだろう

20代後半に差し掛かってから、自分の価値観と社会との間に違和感を感じ始めた千葉さんは、会社勤めのストレスを奥様と一緒に行く年1回の海外旅行で発散させていました。そしてある年、バリ島で見たライステラスや自然の風景、そこで生きている人々の楽しそうな笑顔を見て、今の自分は本当に幸せなのかを改めて考えるようになりました。奥様も同じ価値観をもっていたため、ふたりで「何か違うことをしたいね」とよく話すようになり、その中でも農業という仕事が、太陽とともに寝起きし、自然とともに生きるという点で理に適っていると感じました。
農業について本気で調べ始めたのが28歳の時。それから2年後の30歳で、思い切って会社をやめました。その時点では農業の経験も知識もゼロで、あるのは強い決意と覚悟だけでした。そして、高知県にある土佐自然塾という有機農業の学校に通い始めます。

この土佐自然塾の塾長、山下一穂さんとの出会いが、千葉さん夫妻にとってとても大きいものになりました。
「山下さんは"毎日楽しければいいじゃん？"って感じのすごく前向きな方で、"大丈夫だよ。絶対成功するしやっていけるから。ただそのためには勤勉で真面目で素直でなくちゃいけない"って言うんです。技術的なことはもちろんですが、そういう考え方や、それまで自分がもっていなかった感覚やヒントをたくさんいただきました」
千葉さんは１年間学校に通い、奥様はその間、山下さんの農園で働くことになりました。

そして卒業したあとさらに1年、今度は夫婦で山下さんの農園で研修し、いよいよ就農先を探し始めました。学校を出た人は、そのまま高知県で就農する場合が多いそうですが、関東のほうが広い土地が借りられることや、マーケットが大きいことなどを理由に千葉さんはあえて関東で探すことにしました。それは自分たちが農業で食べていくためでもあり、有機農業の活性化のために成功例を増やしたいという千葉さんの思いでもありました。

バリ島の農村風景

■愛川町で就農！決め手は「土」

自然環境が豊かな神奈川県に絞って探し始めましたが、はじめはなかなか土地が見つかりませんでした。そんな時、会社を辞めてすぐの頃WOOOFでお世話になった茨城県の有機農家の方が、小田原の農業アカデミーの新規就農担当者を紹介してくれました。そして愛川町の就農担当者と繋いでくれたのです。ほかの場所よりも5倍近い面積が借りられたこと、環境がすばらしかったこと、たくさんの人に親切にしていただいたこと、そしてなにより決め手となったのは、愛川町の「土」でした。

「僕が貸していただいた土地は、黒ボク土といって、きめ細かくて粒子が小さい土なんです。黒ボク土は、表面は乾いても下のほうは水を保ちます。水はけがいいけど、水持ちがいい土なんですね。農業は土作りがすべてですから、この土だったら、ある程度自分の技術的に足りない部分もカバーしてくれると思いました。

しかもそういう土質の土地をわざわざ用意してくれたんですね。それならもう、ぜひここでやりたいと思いました」

畑は全部で11ヶ所、作付け面積は1.7ha。これを夫婦ふたりで切り盛りしています。手が回りきらない部分もありますし、有機栽培なのでどうしても草は生えますが、地主さんや隣接する畑の人たちも、みなさん暖かく見守ってくださっているそうです。

■前向きに楽しむことの大切さ

今でこそ順調に売上を伸ばしている「NORA～農楽～」ですが、１年目の前半は、なかなか作物がうまくできませんでした。特に夏野菜はダメでした。ちょうど７月にお子さんが生まれ、千葉さんは農作業に、奥様は子育てに手いっぱいで会話も噛み合わず、気もち的にも落ち込んでいきました。

このままではダメだと思っていた時、山下さんの紹介で毎年10月に日比谷公園で開催される「土と平和の祭典」のトークステージに、新規就農した若者の代表として出演することになりました。そこで千葉さんは、自分のことを話しているうちに気もちが前向きになったのだそうです。

「これだけの気もちをもってやってきたんだから、もっと前向きにやっていかないといけない、それなのに何を落ち込んでるんだろうって。落ち込んでいたはずが人に話すことですっきりしてしまって、すごく元気になって帰ってきました。それで"ほんと頑張るわ"って思ったら、それにつれて作物の出来もどんどんよくなって、出荷先からの注文もどんどんくるようになったんです。そこからは、売上はずっと右肩上がりですね。最初に目標としていた売上額もクリアできそうです。やっぱり何事も前向きに楽しくやってないとダメなんだな、そうじゃないと作物も応えてくれないんだなと思いました」

たとえば、魚のあらを肥料にした魚肥を使いたいと思い、茨城の農家さんから小田原の鈴廣かまぼこの副社長さんを紹介してもらいました。鈴廣かまぼこでは、自社が作る魚肥「うみからだいち」を使って作られた有機野菜を、直営のレストランで仕入れて使っています。魚肥を売ってほしいと思って訪ねたのに、逆にぜひ野菜を卸してほしいと言われ、大きな出荷先を得ることになりました。

「本当に僕らは人に助けられています。人間ってこんなに人に助けられて、助け合って生きていけるんだなぁっていうことを日々実感しています」